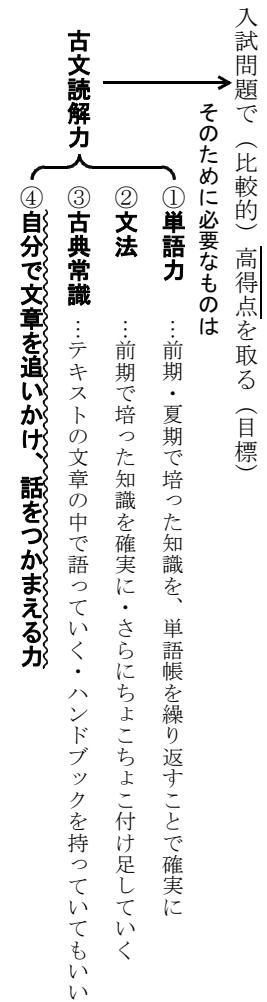


☆後期もプリントはH.P 「イクヲのプリント置き場」 (<https://kobun.webnode.jp/>)・「裏倉庫」 (<https://urasoukol.webnode.jp/>) の「授業の補助プリント」のページに、前日にはアップロードしていきます。

### 【後期の講義について】

1 各回、その文章を通して学べるところを学び尽くす。(復習を丹念にしてください)



### ★共通テストの選択肢を攻める戦略

(あまり必要なくなっているけれど)

- 2 予習はかならずすること。(後期はもう、本文をノートに写すということは必ずしも必要ではない)
- a とにかく文章を何度も読んで、「誰が誰にどうした」かをつかまえなさい。(後掲A・B参照)
- b 選択式の設問の解答は、「なんとなく」ではなく、本文を根拠に論理的に解答を導き、説明できるように。
- c 記述型の設問の解答は極力答案を作つてほしい。無理でも箇条書き程度で、「こんなことだらうな」とメモを作つてみよう。
- d 前回文章の途中で講義が終わつていて、一応予習をしてあつても、前日にもう一度丹念にその文章を精読してから講義に臨む」と。

3 復習は二段階で(あるいは何段階でも)。

- a まず講義後できるだけ早く、その講義を頭の中で再現しつつ、学んだ範囲の文章を読み返しなさい。
- b さらに、その文章の中で伝えられた学習項目をマスター。指示された単語や文法事項を調べ、マスターしなさい。
- c ある程度時間を置いてから(2~4週間後、話を忘れた頃に)、白紙の本文を読んで、話を辿ることができ、的確に解答を導けるかどうか見直しなさい。その際、つつかえる所や分からぬ部分があれば、何かが抜け落ちている。そこを再復習しなさい。

### 【古典（古文）とは】

- A 古典（古文）とは劇**テラ**である——と意識しよう・見ようとしてしよう(文章を頭の中で映像化しよう)  
テレビでドラマを見るときと同じように
- 場面(いつか・どこか・季節は)  
登場人物(誰がいるのか)
- 何をしているのか(誰が誰にどうしているのか)
- 絵(図をかいてもよい)
- が見えていくなくてはならない

- B 古文(物語)を読むとは=文章から人間**テラ**をつかみ取る作業をする」とだ

…そのために、場面を思い浮かべ（頭の中で文章を映像化し）つつ以下の三点+αを追いかけ続けなさい

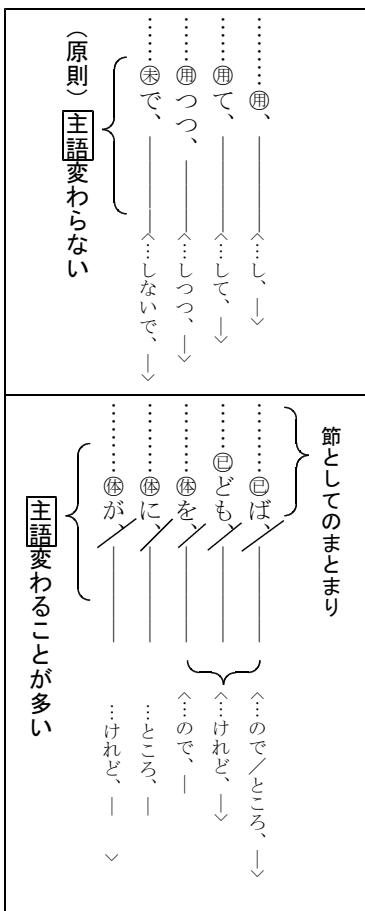
**だれが、だれに（なにに）、どうした** 明らかにしていくこと  
〔全述部〕に対する〔主体〕を書いておく  
〔全發言〕に〔發言者〕を書いておく  
〔客体〕 ……省略される=〔隙間〕になつてゐること多い↑補え

それでもわけの分からぬ場合は

**なぜ** その場で、その人物はそんなことをするのか・言つのか判断せよ=事情納得  
↓注・リード文・その他何でも利用して納得する

↓**すきま**を埋めつつ、話を分かり続けていくこと=〔主語判定+事情納得〕  
古文読解

C 長い古文は適当に区切つて読む=主語の変わり目で区切る…左は読点「」前後の主語のかねあいのまとめ



↑これは規則ではない  
單なる和文の傾向  
大切なのはドラマと  
してのつじつまがあ  
うかどうか

a 「を・に・が・ど・ば」で区切つてそれぞれ主語（誰が誰にどうしたか）を押さえる（基本）  
ただし…… 心はやれども、念じて待つ  
……………

D (予習時) (場面を思い浮かべ、ドラマをつかまえた結果を) 本文に書き込みをしておこう  
a 場面を思い浮かべるのに役立つ情報(時・場所・アイテム等)は○で囲む→けつこういいかげんでもよい。  
ただし、「」の情報を見逃すと話が分からなくなる」という情報は確実に印。

b 人間(登場人物)が出てくれば、□で囲む。

c 主語の変わり目には区切れ目マーク( )。

d 省略されている主語や目的語、話者などを書き込む。

←

(授業時) 自分の捉え方の間違ひを赤で修正→(復習時) 間違えた原因を追及し、つぶす。

## 【五】『大鏡』 とりあえず読んでみようか

A 【理系にとつては参考・文系は一応頭に入れること】

### 大鏡

(平安・後期) 作者不詳 歴史物語

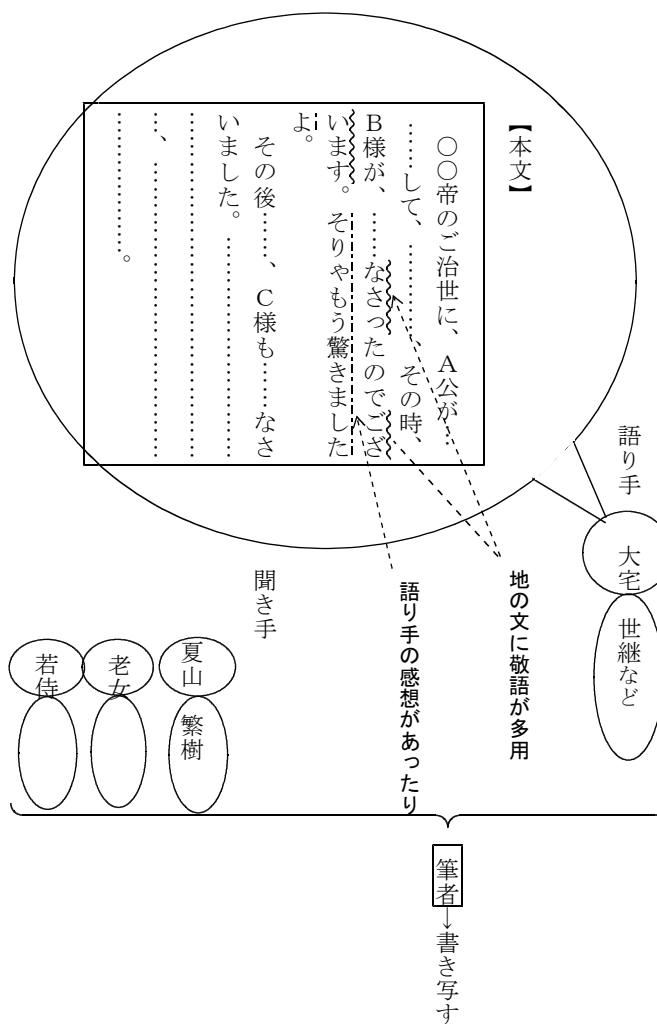
(特徴) 四鏡の初め

紀伝体 (平安初期～中期) (帝→天皇紀・臣下→列伝「○○伝」)

(形式) 道長の絶頂期のある日、雲林院の菩提講で出会った、大宅世継(百九十歳)と夏山繁樹(百

八十歳)が若侍を交えて昔話として歴史を語ったのを、筆者が筆録したという形式  
↓地の文が語りの形式になつてゐる(敬語の多用)

【大鏡】 ……老人が若侍を交えて、昔話として歴史上のエピソードを語る



### B 【古典常識】

\* 三蹟：和様書道 (平安中期) の三人の能書家、すなわち小野道風・藤原佐理・藤原行成。  
三筆：平安初期の三人の能書家、嵯峨天皇・空海・橘逸勢

4 「ほど」 [程] ↓ 時間 ①時・時間・月日・間

時間的空間的社會 ↓ 空間 ②(…の)ころ・時分・時期  
に程度・頃合い

↓ 空間 ③距離・隔たり・道のり

↓ ④あたり・付近  
⑤広さ・大きさ  
⑥身分・地位・家柄

↓ ⑦年齢・年のころ  
⑧ようす・ありさま

↓ 形式名詞 (「体十ほどに」の形 (接続助詞的)  
⑨～すると～したところ～する時に～するうちに  
⑩～ので～から

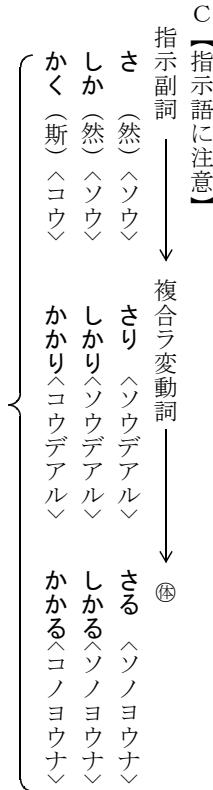
5 わたる【渡る】xからyへと移動する

①渡る

- ②移動する・行く・来る・通る  
 ③(年月を) 過ごす・経過する・生活する  
 ④⑤いらっしゃる・おいでになる

⑤(補動) 一面にうする・うし続け

6 こちなし【骨無し】 ①無骨である・無風流である ②ぶしつけである・無作法である



いつたいドウナノカ内容を明らかにすること

D 【代動詞に注意】  
 「す・ものす」+「つかうまつる(謙譲)」「あそばす(尊敬)」  
 「あり」+「侍り(丁寧)」

例 馬にてものせむ→馬で行こう 破子(=弁当)などものす→食べる  
 「……」とあり→言う・書く・詠む・聞く等)

↓具體化してとらえよ(訳せ)  
 代動詞になることあり

D かづく (四) ①かぶる ②(褒美・祝儀などを) いただく  
 「被く」(下二) ①かぶせる ②(褒美・祝儀などを) 与える

## E 助動詞「る」「らる」(下二段型活用)

接続: 「る」 … 四段・ラ変・ナ変の未然形 (四ラナ未接続) → 「ーある」

「らる」 … それ以外の未然形

意味: イ 自発へ(自然ト) → (ラ) レル・サレテナラナイ・セズニハイラレナイ・ツイーシテシマウ <= 尊敬へナサル

ロ 受身ペーレル・ラレル <= 可能ペーデキル

a 意味の識別: 現代語の「レル・ラレル」を思い浮かべて何となく分かれば良い

・人間の心関係の語・無意識の動作とからむ時、自発であることが多い

笑ふ・泣く・嘆く・驚く・思ふ…: 等十給ふ

・無理なら 四回訳していいのを選ぶ

\* 「れ給ふ」「られ給ふ」の「れ」「られ」は普通尊敬ではない

いみじく思ひ嘆かるれど、いかがはせむ。へたいそう嘆かずにはいられないが、どうしようもない。自発

ロ 問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。(問い合わせられ、答えることができなくなつてしまひました)受身

ハ 目も見えず、ものも言はれず。(目も見えず、なにも言うことができない)可能

ニ かの大納言、いつれの舟にか乗らるべき。(あの大納言は、どの舟にお乗りになるのだろうか)尊敬

\* 「る・らる」があれば、「レル・ラレル」を思い浮かべる

F 助動詞「す」「す」「たす」(下二段型活用)

接続: 「す」 … 四段・ラ変・ナ変の未然形 (四ラナ未接続) → 「ー<sup>す</sup>」

「さす」 … それ以外の未然形 ↓ 「ー<sup>す</sup>・ー<sup>さす</sup>」

意味: イ 使役へ(スニ) → セル・サセル <= 尊敬へナサル・オーニナル

a 意味の識別の仕方

i 誰かに何かさせている時 → 使役

ii 尊敬語を伴わない 「す・さす・しむ」 → 使役

iii 尊敬語 (「給ふ」「おはす」「おはします」等) が伴う時 (例 「**まし**給ふ・**させ**給ふ・**しめ**給ふ) → 尊敬が多い

iv 尊敬語 (「給ふ」「おはす」「おはします」等) が伴う時でも、誰かに何かさせていたら → 使役

妻の嫗めおうなにあづけて養はす。妻の老女に預けて育てさせる) → 使役

\* 「**まし**・**さす**・**しむ**」 (尊敬語伴わず) → ヘヘセル・サセルを思い浮かべる

「**まし**せ給ふ・**させ**給ふ・**しめ**給ふ」 → (その人自身が) ヘヘナサルのか、

(誰かに) ヘヘサセナサルのか、立ち止まって判断すること

G	<b>まし</b>
まし	未
ましか (ませ)	○ 用
	まし 止
	まし 体
	まし 已
ましか (ませ)	○ 命
	特殊

接続 … 未然形

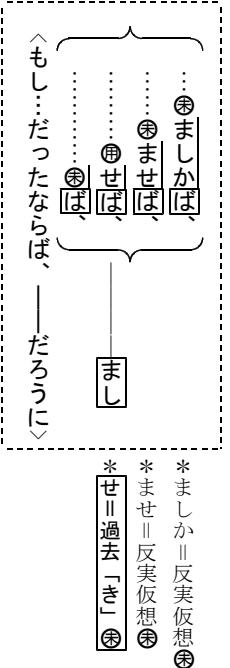
意味 … イ 反実仮想へ (モシ) ヘタトシタラーダロウニ

イ 実現不可能な希望へ —— タライノニ・ヨカツタノニ → イのバリエーション

ロ ためらいの意志へ —— シタモノダロウカ・シヨウカシラ → 疑問語を伴う 何・誰・や・か等…ま

a 識別の仕方

① 反実仮想文の公式 「仮定 (…**まし**) —— **まし**」 にはまる → 反実仮想 (最優先)



② 左右以外の **まし** → 実現不可能な希望へ —— たらいいのになあ

③ 疑問文の中の **まし** → ためらいの意志へ —— しようかしら・したものだらうか

① 鏡に色、形あらましかば、映らざらまし。 → 反実仮想

（鏡に色や形があつたならば、（何も）映らないだらうに）

② ねたき。言はざらましを。 → 実現不可能な希望 (→ 反実仮想公式でも疑問文でもない)

（くやしい。言わなければよかつたのに）

③ これに何を書かまし。 → ためらいの意志 (これに何を書こうかしら)

\* 「まし」はそれをみたらへくを思い浮かべようとひとことで言えない

J 否定法の「**まし**」

～**まし**ば～**まし**あらめ、…… ～**まし**ならばともかく・いいだらうが、  
X ～**まし**あらめ、…… (実際はそうではないのだから)、……  
～Xはいいだらうけど、Xならしかたないが、……

思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもそもまたほどなく失せて、  
へ（死んだ人を）思ひ出して慕う人がいる間はよいだらうけれど、そんな人もたますぐ死んで……』

## 【解答例】

- |    |                                |     |     |
|----|--------------------------------|-----|-----|
| 問一 | a エ                            | b オ | c オ |
| 問二 | 【訳例】傍線部                        |     |     |
| 問三 | 藤原通隆が、藤原佐理が遅参したことに対し、失礼だと思った。  |     |     |
| 問四 | 藤原通隆が、藤原佐理に、褒美として女装束を与えたということ。 |     |     |
| 問五 | 【訳例】傍線部                        |     |     |
| 問六 | ウ                              |     |     |

## 【訳 例】

(佐理大式は)「性格が、怠け者、少しはだらしない人とも申し上げてしまつてよさそうでいらっしゃった。  
故中関白殿(=藤原道隆)が、東三条邸を修築しなかつて、障子に歌絵をお描かせになつた色紙形を、この  
大式(=藤原佐理)にお書かせ申し上げなさつたのを、(佐理大式は)あまり人が多く騒がしくないうちに参上  
してお書きになつたらよかつたにちがいないので、関白殿がお出ましになり、上達部・殿上人など、しかるべき  
人々が参集して後に、日が高くなるまで(関白殿たちを)お待たせ申し上げて参上しなさつたので、(関白殿  
は)少し失礼だとお思いにならずにはいられないけれども、そうであるといつてそのまま(=不快に思つて描  
かせずに)いてよいことでもないので、(書くよう)に促し、佐理大式が色紙形を)書いて「退出申し上げなさる  
時に、(関白殿が佐理大式に)女装束を褒美としてお与えになるのを、(佐理大式は)そうしなくてもきっとよ  
さそうだとお思いにならずにいられないけれども、捨て置いてよいことでもないので(受け取つて)、  
大勢の人の中をかき分けお出になつたのが、やはり、怠け癖ゆえの失態であつた。「(佐理大式が) 静かな朝の  
うちに、早く参上してお書きになつたならば、このよう(に不体裁なこと)だつただろうか、いや、このよう  
ではなかつただろうに」と、(その場にいた)人誰もが思い、自分(=大式自身)でも思つていらつしゃつた。  
「身分がきわめて低い専門家、普通の身分が低い者などには、このようなことはなさつてよいだらうが」と、  
殿(=藤原道隆)のことを非難申し上げる人々もあつた。

## 【五】の学習内容——左の項目を見て、自分で説明できるようになつてゐるか確認してください

- 「大鏡」の語りの形式(理系は参考・文系は覚えておくこと)
- 「三蹟」「三筆」(理系は参考・文系は覚えておくこと)
- 「る」「らる」の意味の識別
- 「す・さす」の意味の識別
- 助動詞「まし」
- 指示語「さ・しか・かく」
- 代動詞
- 「～」そあらめ、「～」X「そあらめ、……」

## 【D】『紫式部日記』——複数資料にチャレンジ

A 隨筆・評論（非物語）の読み方

a 登場人物がない文章の場合

- ・素直に読む

・現代文と同じくテーマをつかまえ、筆者のイイタイコトをおさえていく

b 登場人物がある文章の場合

- ・日記の読み方用 → “私（＝筆者）”が登場する物語として読む

B 複数資料→恐がらない。要するに一つ一つの文章を古文としてまともに読めればよい

選択肢の一節一節を【文章】に書いてあつたことに照らして「いけるか／駄目か」判断すればよい  
い

3 もてなす

①物事をとり行う・とりはからう・処置する ②取り扱う・待遇する・世話をする  
③振る舞う・見せかける・振りをする ④優遇する・もてはやす・ちやほやする

C 終助詞「もの」グループ

体 **ものの**・**ものから**・**ものを** → 逆接確定条件へ＼ノニ・ダガ・ケレド＼

つれなくねたき **ものの**の忘れがたきにおぼす。

（無情でうらめしいけれど忘れがたいお方だとお思いになる）

\* 「ものを」は和歌の句末で、終助詞的に詠嘆へ＼ノニナア・＼ダナア＼のこともあえる

# 【E】『若の衣』——貴族の恋愛・結婚・贈答歌・和歌の見立てを知る

## A 貴族の恋愛～結婚～結婚 【古典常識】

①垣間見（かいまみ）・噂や評判：昔の女性は肉体関係を結ぶまで、親・同母兄弟以外には顔を見せなかつた  
→ ♥

②文・懸想文（けそつぶみ）：ラブレターを出す・和歌を付ける

③新枕

：初めての共寝・呼ばふへ求婚する・逢ふ・見る・語らふ・契る（男女が深い関係になる）の意も  
→ 後朝（きぬぎぬ）：共寝をした翌朝の別れ

④後朝

：後朝の文・共寝をした翌朝、仕事・家に帰った男から手紙（和歌）を送るのがマナー

⑤通ふ

：男が三夜続けて通つて、正式な結婚となる・昔は、一夫多妻制で、通い婚が普通

⑥相住み

：相添ひ＝同居

：相具す＝連れ添う

：三年間男が通つてこないと、結婚関係は自然消滅する。

⑦音無し＝音沙汰がない

：通い婚であるため、男が通つてこなくなることもある。

## B 「やる（遣る）」と「おこす（遣す）】



## C 「くげなり」型形容動詞になる

形容詞・語幹+げなりへーな様子である・ーらしい・ーそうだ

ナリ活用形容動詞になる

2つまし

【慎まし】

出来事感情をつつみ隠しておきたい気持ち

おぼつかなし

【覚束無し】  
対象がぼんやりして  
いてどふえどころがない  
様子

①ほんやりしている・はつきりしない  
②疑わしい・不審だ  
③心配だ・気がかりだ・心もとない  
④心細い・気にかかる  
⑤待ち遠しい・会いたい  
⑥疎遠だ・無沙汰している

## D 【和歌】

### ・ 和歌はセリフ

登場人物のその時の【心情】の現れ→そういう場面で人間がふつうどんな気持ちになるか

- ・ 心情語（形容詞・形容動詞など）
- ・ 述部（区切れ）

に注意

「手順」0まず、誰が、どんな状況で詠んだ歌か、をおさえる（最重要！）→その人物のその状況の心情が表現され

- ①とりあえず、五・七・五・七・七に切る
- ②文法的・意味的に「。」にあたる部分は「。」を打つ——区切れを見つける

（重要事項26P）

- ③倒置に注意しつつ、心情の表れ（＝心情語・述部に着目）として解釈する

\*修辞（縁語・掛詞・見立て）にも注意

## F 【和歌の修辞】

e 見立て：二つのものの共通点に着目し、あるものを他のものとみなして比喩的に表現する（→「見立てる」「なぞらえる」という）。あるもの（自然）で他のもの（人間に関連すること）を意味する

例 としを経て頭の雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにけり

（年をとり、頭は雪のようないわゆる白髪になっていても、霜ならぬ答を目の前にすると老いの身は冷えてふるえています）

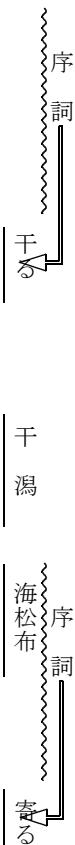
「白髪」を「雪」に見立てている（なぞらえている）（「頭の雪」が「白髪」を比喩している）

「雪」「しも」「冷え」は縁語

☆物語の中で、誰かが和歌を詠み、その中に、字面そのままではびんといなもの（＝自然物——動植物、鳥など）があれば、見立てを疑おう

G 和歌……「景」と「情」

古今和歌集（恋歌三） 清原深養父



満つ潮の流れひる間をあひがたみみるめの浦によるをこそ待て

「満つ潮」「流れ」「干る」「干鴻」「海松布」「浦」「寄る」→「海」の縁語

……ど、が「恋歌」？



満つ潮の流れひる間をあひがたみみるめの浦によるをこそ待て

泣かれ 昼間 逢ひ難み 見る目 夜 ……情（人の気持ち）

\*いつでも和歌が「景」と「情」の二面を持つとは限らない。「景」ばかりの歌も、「情」のみの歌もある  
\*しかし、掛詞や縁語などを答えねばならない時、「景」と「情」という考え方はけつこう有効なことが多い

H 「類推」の構文

X だに・すら～。まいて・まして、Y ……。  
(Xでさえ～だ。まして、Y……。(Yならなおさら～だろ？) )

## 【F】 『唐物語』

### A 【共通テスト古文の手順】

①まず、作品名・リード文をチェック→長いリード文の場合は、「これまでの経緯や人間関係を整理すること」が必要（時には図をかく）

#### ②設問チェック

- ・短めの語句の解釈問題があるか。馴染みのある語か・本文読む前に絞れないか
- ・その設問は部分的な読解で解けるものか否か

#### ③和歌の設問はあるか

- ・これまでに見たことのないような設問はあるか

・知識で解ける问题是、先に解く・傍線部だけから選択肢を絞れるなら絞つておく

#### ④本文を読解

（＝すき間を埋めつつ文中からドラマを抽出）しつつ、各設問に解答する

#### \*選択肢を選ぶ際の注意点

- ・なんとなく本文を読んで、なんとなくこの選択肢が答かな？的な選び方はしてはならない
- ・論理的客観的な根拠に基づいて選ぶこと

「この語の意味がこうだから、この選択肢は落とし、この選択肢は残す」

「この助動詞・助詞の意味がこうだから、この選択肢は落とし、この選択肢は残す」

「この選択肢のこの部分は、本文のこの部分に合うから残す」

「この選択肢のこの部分は、本文のこの部分に反するから落とす」

「この選択肢のこの部分は、本文のどこにも書かれていないから落とす」

……などなど、必ず自分なりに説明した上で選ぶこと

#### アなまめかし

現代語とは違い、「みずみずしい美しさ」を表す。そこから「しつとりとした上品な美しさ」の意になる

- ①若々しい・みずみずしい ②優美だ・上品だ

#### B <格助詞> 「と」（連用修飾格） b と c とをマスター

a 動作の共同・引用・変化の結果 等 : 覚えなくて良い

#### b 強調（同じ動詞に挟まれている「と」）

#### 動詞・用+と

（+係×副） + 同じ動詞 <ヒタスラ・ヤタラニ・デンドン…スル・

アラユル・すべての……スル ↑下が連体形の時に多い

来と来ては、ひたすらやつて来て、

生きとし生けるものすべての生きているもの（「し」は副助詞）

#### c 比喩へノヨウニ

↑他の用法でおかしければコレ 東国 の 源 氏 、 雲 か すみ と 攻 め の ぼ る 。 （東国 の 源 氏 が 雲 や 霞 の よう に ） 大量 に 攻 め 上 る

#### d 引用ヘト

渡守、はや舟に乗れ、日も暮れぬ」といふに

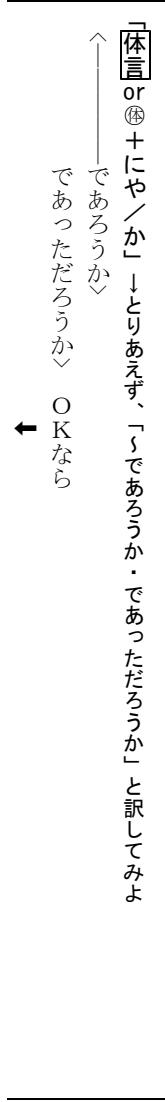
B文末の「～にや／か」——文中で挿入句のこともある「～～にや・か・……」

〔体言 or 〔十にや／か〕→とりあえず、「～であるうか・であつただろうか」と訳してみよ

↑であるうか

であつただろうか

OKなら



\* 【F】が終われば次は「基幹編」の【六】

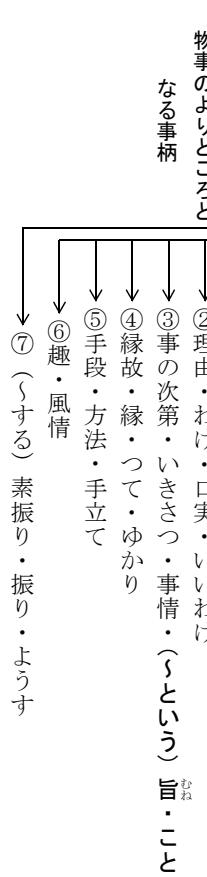
平安・鎌倉時代、宮廷・貴族の間で盛んに行われた一種の文学的遊戯。左・右に分けた歌人の歌を、左右一組み合せて何番かに構成し、各番ごとに優劣を判定する。判者の判定は勝・負。持(引き分け)で示され、判定の論旨として判詞が述べられる。現在最古の歌合は『仁和元年(895)の『在民部卿家歌合』、最大の歌合は建仁元年(1201)の後鳥羽天皇主催の『千五百番歌合』。平安末期から鎌倉初期へかけてが歌合の最盛期で、それに伴って歌学も発達した。

(古典文学事典 事項編)

【歌合】

\* 物合はせ：左右に分かれて物を出し合つてその優劣を競う遊び(歌合・貝合・絵合……)

右の方人 vs 左の方人 判者→「右勝」or「左勝」or「持(引き分け)」



D 引き歌：古歌(多くはその一部)を引用することを引き歌という  
 引き歌の表現する心情＝引用者の心情

(作者が登場人物の心情やその場面の情趣を引き歌で表現する)こともある

6 さるべき  
 =  
 しかるべき

① そうなるにふさわしい・しかるべき・適當な・相応な  
 ② 当然 そうなるはずの・(前世から) そうなる宿縁の  
 ③ それ相当の・立派な・えらい

C 插入句

←(係) や む へ  
 か む も へ  
 く む る へ  
 け む る へ  
 一 ん へ  
 一 ん へ  
 一 ん へ

\* 「～」の挿入部分が、「～」のメイン部分に対する原因の推量となる  
 \* 插入句の下は普通ではないこと・異常なことが書いてあることが多い

体言 or 体十に や/か ←(係) 疑問・反語 (あらむ) へ――であろうか。(いやそうではない) → 断定「なり」(ありけむ) へ――であつただろうか。(いやそうではない) → が省略 へ――ではなかろうか。(そうだよ) → コツチの訳がピッタリくることもある  
 \* 「あり」部分は「はべり・さぶらぶ」「おはす」のこともありうる

〔六〕  
『今昔物語集』

A 優用の敬語  
…  
「参る」は「〇〇参る」で貴人のために〇〇し申し上げる・して差し上げるの意で使われる

例

大殿油まゐる㊪  
（貴人のために） 灯火をお灯し申し上げる  
お上づする

みかうし  
三  
の  
二  
一  
各  
三  
二  
一  
上  
げ  
す  
る

御格子まゐる(貴人のために) 格子を  
お下げする

前編第1回は、アーヴィングの「死んだ娘の手紙」を題材に、死後も娘の手紙が現れる不思議な出来事について語る。

ういうものはそうそつあるものではないので②「めつたにない・珍しい」。当然そういうものは③「目新しい・新鮮だ」ということになる。」

B ほととぎす【杜鵑・霍公鳥・郭公・時鳥・子規・杜宇・不如帰・沓手鳥・蜀魂】

(鳴き声による名か。スは鳥を表す接尾語)

方には只方の三ツの鳥、方には何に似るか、形  
ワザノハナジの鳴二重羽、四羽、育雛を委ねる。鳥

ウグイスなどの巣に産卵し、抱卵・育雛を委ねる。鳴き声は極めて顕著で「てっぺんかけたか」「ほつちゃんかけたか」などと聞こえ、昼夜ともに鳴く。夏鳥。古来、日本の文学、特に和歌に現れ、あやなしどり・くつてどり・うづきどり・しでのたおさ（死出の田長）・たまむかえどり・夕影鳥・夜直鳥などの名がある。（季語）夏。万葉集(18)「曉に名告り鳴くなる」

ほととぎす鳴くや五月の菖蒲草あやめも知らぬ恋もするかな・古今・恋

五月までの花柳の香をかけば昔の人の袖の香をするへ古今・夏

B 傍線部問題に関する注意事項（傍線部 자체をしつかり解釈することも大切だが、さらに  
i 傍線部を含む一文を押さえよ（その傍線部の主体・客体は何かということも大切）  
ii 傍線部に指示語がからむときは→その指示内容を明らかに

2 奉る ⑬ 差し上げる（「与ふ」の謙譲）

【被く】 （下二）	①かぶせる ②（褒美・祝儀などを） 与える	①かぶる ②（褒美・祝儀などを） いただ
3 かづく （四）		

問一 1 しだいに

2 目新しく

問二 2 御格子を下ろしてさしあげるのを途中でやめて

6 上にお召しになつて紅色のお召し物一枚を脱いで

7 たいそう声を大にしてほめそやしたのだった（口を極めてさかんに誉めた）

問三 たつた今鳴いたほととぎすについて、すぐに歌に詠むこと。

問四 「あれは誰か」という意味の黄昏時に、その問い合わせに応じて名告りをするように鳴くらしいなあ。

## 【六】の学習内容

- 慣用的敬語「○○参る」
- ほととぎす・鳴き声・時期・花櫻との関係
- 傍線部問題に関する注意事項
- 敬語「奉る」「侍り」「候らふ」（複数の意味・敬語の種類を持つ敬語）
- 係助詞「や・か」の文末用法
- 古語「—さす」「—はつ（果つ）」「かづく」など

## 【通釈】

今となつては昔のことだが、御堂（＝藤原道長）が、大納言で一条殿に（婿として）（通い）生活なさつていた時、四月の一日ころ、日が次第しだいに暮れるこになつたので、家人たちをお呼びになつて、「御格子をお下ろしたせ」とおつしやつたところ、祭主の三位輔裁が勘解由の判官であつたのだが、参上して、（道長のいる）御簾の中に入つて、御格子を下ろしていいたところ、南向きの部屋の（の前の）梢に（）の時期には）目新しくほととぎすが、一声鳴いて飛んでいったので、殿（＝道長）は、これをお聞きになつて、「輔親はこの（ほととぎすの）鳴く声を聞いたか」とおつしやつたところ、輔親は、御格子を下ろしてさしあげるのを途中でやめて、ひざまずいて、「お聞きしました」と申し上げたので、殿は、「それでは（ほととぎすについての歌を詠むのが）遅いぞ」とおつしやつたところ、輔親は、このように申し上げた。

あしひきの……山のほととぎすは（まだ初夏だというのに早くも）人里に慣れて、夕暮時に名乗りをしているらしいなあ。

と。殿は、これをお聞きになつて、たいそうお誉めになつて、（自分が）上にお召しになつて紅色のお召し物一枚を脱いで、（褒美として輔親に）お与えになつたところ、輔親は、（それを）いただいて、伏し拝んで、御格子をお下ろし申し上げ終えて、（いただいた）御着物を肩にかけて、家の詰所に出たところ、家人たちがこれを見て、「これはどうしたことだ」とたずねたので、輔親が、さきほどのことを語つたところ、家人たちは皆、（その話を）聞いてたいそう声を大にしてほめそやしたのだった。

# 【七】『枕草子』

A 枕草子 (理系にとつては【参考】・文系はここに書いてあることくらいは暗記しておいてね)

成立—平安(中)(一〇〇〇年頃)

筆者—清少納言 (一条天皇の中宮定子に仕えた女房。父は、村上天皇の命を受け源順らとともに「後撰和歌集」の撰進にあたった歌人清原元輔)

ジャンル—隨筆 (約三〇〇の段からなる)

物尽しの段 (「～なもの」ではじまる) → 「～なもの」のイメージに基づいて読む

〔随想的な段 (いわゆる隨筆の部分) ↑ 素直に読み、現代文と同じようにイイタイコトおさえる

日記的な段 (一条天皇の中宮定子に仕えた女房としての日記) → 日記として読む

\* わが国最初の隨筆文学

\* 明るい機知を含んだ「をかし」の精神

\* 『方丈記』『徒然草』とともに三大隨筆と言われる

B 日記系読解

(の基本) : 日記・紀行文・隨筆 (登場人物のあるやつ)

: 「私(=筆者)」が登場する物語として読む

→ いきなり主語なし・尊敬語なし述語→主語は「私」

地の文中で、自分の行為に尊敬語は使わない

(例外) 「和泉式部日記」: 主人公=「女」(=筆者)と「宮」(=敦道親王)との恋物語。筆者が見ることでの

きない宮の様子や心情まで描写されている。

① 「女」と「宮」の恋 (足かけ十ヶ月) を描いた歌物語 (和泉式部は当時の代表的女流歌人) として読む

② 主語無し述部 (尊敬語なし) → 主語=「女」

〃 〃 (尊敬語あり) → 主語=「宮」

(例外) 「土佐日記」: 筆者紀貫之が、貫之の旅にお供する女性のふりをして書いている (ゆえに「私」=架空の女性)。貫之は文中「船君」などと表記されている

## C 【主体判定のしかた】

① 登場人物を整理→人は□で囲む・一覧表や図にする \* 呼称の言い換えにも注意

② 場面を思い浮かべて (絵を描いてもイイ)

③ 全述部・全発言について判定

a 接続助詞・前との統合具合で (「ば・ども・が・を・に」の前後では主語が変わりやすい)

b 引き算で→登場人物一覧からその主語になり得ないものを引いていく

c 敬語によって→登場人物によって、敬語を使つたり使わなかつたり・レベルが違つたり

自分の動作に尊敬語は使わない

セリフの中では、相手の動作には尊敬語を使う

d 後ろからさかのぼつて判断

e 古典常識によつて

f 文法的判断によつて

g リード文や注のヒントによつて

h その他の知識 (文学史・日本史) によつて

……どのやり方を使っても良い・とにかく理詰めで、ドラマとしてつじつまの合う判定を

☆ 物語冒頭にいきなり主語なし述語→主体(主語)=主人公と考えて読み進めよ。矛盾が生じれば、修正する

3はやく ①ずっと前・以前・昔  
はやう ②すでに・とっくに・前に

③(多く、文末に「けり」を伴って)事実・真相の気付きを示す。なんとまあ・実は・驚いたことには

る

#### D【代動詞に注意】(再)

「す・ものす」<sup>ナ</sup>「つかうまつる(謙譲)」「あそばす(尊敬)」

「あり」<sup>ナ</sup>「侍り(丁寧)」

代動詞になる」とあり  
→具体化してとらえよ(訳せ)

例 馬にてものせむ→馬で行こう 破子(=弁当)などものす→食べる  
「……」とあり→言う・書く・詠む・聞く等)

E終助詞「ものー」グループ

体 ものの・ものから・ものを→逆接確定条件へノニ・ダガ・ケレド  
つれなくねたきものの忘れがたきにおぼす。

く無情でうらめしいけれど忘れがたいお方だとお思いになる

\*「ものを」は和歌の句末で、終助詞的に詠嘆へノニナア・ダナアのこともあえる

F絶対敬語:使う相手(敬意の対象)が決まっている敬語

奏す:「帝・院(上皇法皇)に」申し上げる

陪す:「皇后・皇太子などに」申し上げる

みゆき(尊)  
御幸:帝(天皇)のおでかけ  
行啓:院(上皇・法皇)のおでかけ  
行啓:中宮(皇后)・東宮(皇太子)のおでかけ

#### G二つの「給ふ」

(四) 尊敬

(本動詞)お与えになる・下さる(「やる、与ふ」の尊)  
(補助動詞)くなさる、おくなる

(下二) 謙譲(丁寧)(補助動詞)～ます・ております

(会話・手紙の中)自分をへりくだつて述べる時に使う

話し相手に対し、自分をへりくだつて述べる時に使う

話し相手(聞き手・手紙の読み手)に對する敬意を表す

↓「話し相手に」に注目すると、丁寧語

「へりくだつて」に注目すると謙譲語といふことになる

↓自分の「思ひ・知り・聞き・見」+「給へ」「給ふる」「給ふれ」の形

例 ……は知り給はず。「(〇〇は)……のことは知つておりません」

……は知り給はず。「(私は)……のことは知つておりません」

活用表は

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段・尊敬	たまへ	たまひ	たまふ	たまふ	たまへ	たまへ
下二・謙(丁)	たまへ	たまへ	○	たまふる	たまふれ	○

↓何形であつても重なつてゐるものはないので、識別できない場合はない

## 【七】の学習内容

- 日記系読解の基本
- 主体判定のしかた
- 副詞「はやく・はやう」
- 代動詞（復習）
- 終助詞「ものー」グループ（復習）
- 絶対敬語
- 二つの「給ふ」

## 【通釈】

（私が）まだ暗いうちに起きて、（使用人に）折櫃などを携えさせて、「これにその（＝雪山の）白いようなところを入れて持つて来なさい。汚そなところはかき捨てて」と言つて（中宮職に）行かせたところ、（使ひにやつた者が）たいそう早く持たせてやつたものをぶら下げて、「すでに（雪は）なくなつてしまつていましたよ」と言うので、実に驚きあきれたことで、面白く詠んで、人にも語り伝えさせようと苦吟していた歌も、嘆かわしくも甲斐のないことになつてしまつた。

「どうしてそうなつたのだろうか。昨日まではあれほどに消え残つていたようなものが、夜の間に消えてしまつているとかいうことよ」と力を落として言つと、「木守が申しましたことには、『昨日、とても暗くなるまで（雪山は）ございました（消え残つっていました）。褒美をいただこうと思つていたのになあ』と言つて、手を打つて（悔しがつて）騒いでおりました」などと言つて騒ぐうちに 内裏から（中宮様の）お言葉がある。

「それで、雪は今日まで消え残つているか」とお言葉があるので、実にしやくで殘念であるけれど、『（旧）年内、元日までさえ消え残らないだらう』と人々（＝女房たち）が中宮様に申しあげなさつたのに、昨日の夕暮れまで消え残つておりましたことは、實にたいしたことだと（私は）存じます。今日までというのは、出来すぎです。『夜の間に人が（私の勝ちを）ねたんで取り捨てたのです』と中宮様に申し上げてください』などと、返事申し上げた。

# 【H】『源氏物語』「柏木」

A 出家  
世俗の世界を捨て、仏門に入ること。古典世界では多くの人物が、この世に絶望したため、心の平安を得るため、死後の安息を願つて、などさまざまな理由から出家をしている。

<b>此岸</b>	=	迷いの世界
俗世	=	汚れた所・つらい所

<b>彼岸</b>	=	悟りの世界
仏の世界	=	清らか・平安

↑ 慶求淨土  
出家

↑ 興求淨土

死後この世界へ行けることが願い

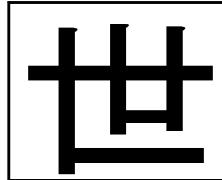
西方淨土：阿弥陀の淨土は西方にあると信じられた  
「池の中に蓮華あり、大きさ車輪の如し」（阿弥陀經）

☆**出家**とは生きながら死ぬ（俗世を離れ、仏の世界に入る・仏弟子になる）こと

||すべての  
財産  
縁  
権勢|| を捨てる（すべての執着を捨てる）

↓残される家族としては、その人が死んだに等しいくらい悲しいこと

## 【「出家する」を表す慣用表現】



すつ（捨つ）  
そむく（背く）  
はなる（離る）  
のがる（逃る）  
いとふ（厭ふ）  
いづ（出づ）

**頭** あたまをまるむ（丸む）  
かしらおろす（下ろす）  
髪をおろす・落とす・かざりおろす

**様** かはる（変はる）  
かふ（変ふ）

**身** やつす（棄す）  
すつ（捨つ）

そむきすつ（背き捨つ）・そむきはつ（背き果つ）

入道す・家をいづ（出づ）・ひじる（聖る）

一 あぢきなし  
人の力や自分の心ではどうしようも  
ない状態や、  
それに対する苦々しい気持ち  
あきらめの気持ち

① (人の力や心では) どうすることもできない・どうにもならない  
② (どうしようもない) 不快である・にがにがしい  
③ (努力ではどうにもならず) 無益である・むなしい  
④ (思い通りに行かないが) どうしようもない・仕方がない  
⑤ (どうにもならず) 張り合いがない・つまらない

B 注意すべき同音異義語「ゝ」と「」

事  
言  
異  
殊  
(に)  
文脈に応じて判断  
〈格別に・特に〉

C 接続助詞「ながら」

c 動詞用

形動の語幹

ながら

同時並行へシナガラ  
逆接へノニ・ケレド

そのままへノママデ・ソックリソノママ丸ゴト全部

身はいやしながら母なる宮なりける。〈身分は低かつたけれど母は皇族であった〉→逆接

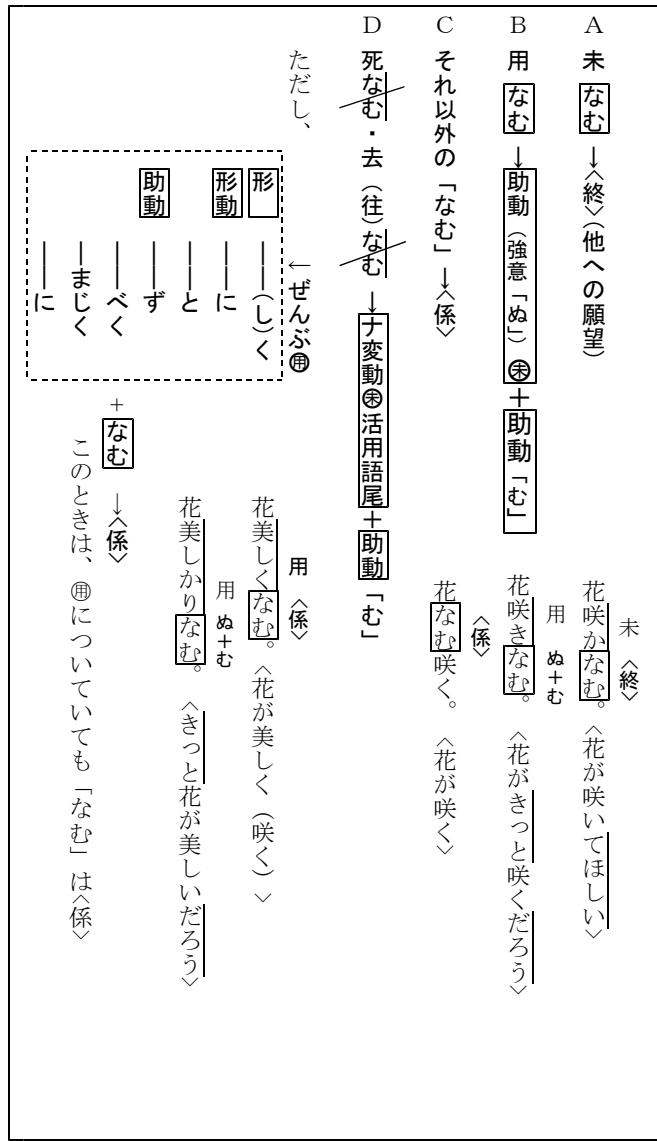
旅の御姿ながらおはしましたり。〈旅のお姿のままでいらっしゃった〉→そのまま

【帳台】



## 【八】『源氏物語』

A 「なむ（ん）」の識別……古典文法四つの「なむ」（花の公式）……古語では「なむ」は、A「終」（他への願望へシテホシイ）・B強意「ぬ」未+「む」（キット）・C「係」（強調）・Dその他がある



### 6 おぼえ 【才】

もと「素材・素質」→身に付けるべき素養

〔漢学を中心とする学問・学識〕・〔音楽中心に芸術の才能〕

① 学問・特に漢学・教養・学識

② (音楽など芸術の) 才能・技芸

6 おぼえ (世の) おぼえ (世間の) 評判  
 (人の) 御おぼえ (貴人の) ご寵愛

— 9 あぢきなし → ① (人の力や心では) どうすることもできない・どうにもならない

人の力や自分の心ではどうしようもない状態や、

それに対する苦々しい気持ち

あきらめの気持ち

① (人の力や心では) どうすることもできない・どうにもならない  
 ② (どうしようもないで) 不快である・にがにがしい  
 ③ (努力ではどうにもならず) 無益である・むなし  
 ④ (思い通りに行かないが) どうしようもない・仕方がない  
 ⑤ (どうにもならず) 張り合いがない・つまらない

こうしろめたし【後日痛し・後方痛し】(後ろから見られたら不安だ・後ろの方が気にかかる)

- ① 不安だ・気がかりだ
- ② 後ろ暗い・やましい・気がとがめる

【解答例】

問一 【訳例】内傍線部

問二 オ

問三 心静かに仏道修行をして暮らしたいという思い。

問四 【訳例】内傍線部

(1) 宮の北の方が亡くなり、火葬されたということ。

(2) 「消え」が「煙」の縁語になっている。

問六 オ

【訳例】

こうしているうちに、お住まいになつてゐる宮殿が焼失してしまつた。ただでさえつらい世の中に、またくどうしようもなく、移り住みなさることができるうな所でますますな所もなかつたので、宇治という所に風情のある山荘をお持ちになつてゐたのにお移りになる。見切りを付けなさつた世の中であるけれども、もはやこれまでと住み離れてしまうようなことをしみじみお思いにならずにはいられない。

(移り住んだ場所は) 網代が近くにあるようで。その水音が耳にやかましい川のほとりで、静かな思いにはそぐわない面もあるけれど、しかたがない。花・紅葉、それに水の流れにも、気を晴らす手立てを求めて、ますます物思いをなさる以外のことがない。このように(世間との交際も)絶え引き籠もつた野山の果てでも、故人(=北の方)がいらっしゃつたならば(こんなに物思いにふけることもなかつただろうに・どんなにか心懇められたことだらうに)と思ひ申し上げない時はなかつた。

見し人も……妻としたあの方も住んでいた邸も煙になつてしまつたのに、どうしてわが身は消え残つたのだろうか。

生きている甲斐がないと(亡き北の方に)思い焦がれなさることよ。

(京にいた頃よりも) いつそう、山また山が重なつてゐる(今の宇治の)御住まいに、訪れ参上する人はいない。いやしい下衆などや、田舎じみた山賤(=山住みの身分のいやしい者)たちだけが、まれに親しくて参上し、お仕え申し上げる。(八の宮が)峰の朝霧の晴れる時がなく(あの歌のように、世の中に対するつらさがまったく尽きない思いで)日々を送つていらつしやるが、この宇治山に、いかにも聖(=山林に隠遁する苦行僧)らしく見える阿闍梨が住んでいた。(その阿闍梨は)学識がたいそうすぐれていて、世の中の評判も軽くないけれど、ほとんど朝廷の仏事にも出仕せずずっと籠もつていたといふ、この宮(=八の宮)がこのように(自分に)近い所にお住まいになつて、寂しい御様子で、尊い仏道修行をなさつては、法文を読み学んでいらっしゃるので、(阿闍梨は八の宮の求道心を)尊くお思い申し上げて、常に(八の宮のもとに)参上する。

(八の宮が)長年学び知りなさつてゐるいろいろなことの深遠な意味を(阿闍梨は八の宮に)説き聞かせ申し上げ、ますますこの世(=現世)がまったく仮のものでむなしることを(八の宮に)お教え申し上げるので、(八の宮は)「心だけは(極楽浄土の池)蓮の上にのぼつたような思いになり、(実際、極楽浄土の)濁りのない池にも住むことができただけれど、まったくこのように幼い人々(=二人の娘)を(この俗世に)見捨てるような心配さだけのために、思い切つて出家する」ともできない」など、(八の宮は)隠すところなくお話になる。